



### 【中世の建物】

流路の東側では、掘立柱建物が3棟（掘立24～26）見つかりました。1区（R2調査）で調査した鎌倉時代の掘立柱建物群（掘立1～5）の30m北にあたります。

今年調査した建物は1間×2間～2間×2間、柱穴は素掘りで直径は20～40cm、いずれも側柱建物です。掘立24は南北棟、掘立25・26は東西棟で1区の建物群とほぼ同じ向きで建てられていること、周囲から鎌倉時代の土器や陶磁器が出土していることから、同じ時代に建てられた建物と考えられます。1区の建物群よりも規模が小さいため、納屋や作業小屋などの簡易的な建物だったのかもしれませんが。

### 【道路遺構】

1区で昨年発見された道路遺構（S302・303）のうち、東側の道路（S302）の続きが見つかりました（S365）。西側の道路（S303）は、流路の浸食により残念ながらほとんど残っていません。道路は古代の流路の東岸に沿って南北に延びており、1区も合わせ長さ約120mになります。

道路の底面に小さな穴が並び砂や礫を詰めていました。また、流路の西側では東西方向に延びる礫を敷いた道路が2本見つかり（S278・358）構造の異なる2種類の道が造られていたことがわかりました。



### 【古墳時代の集落の発見】

調査区の北東で古墳時代前期の竪穴建物が2棟（竪穴3・4）見つかりました。竪穴3は4.9m×4.2m、竪穴4は5.9m×5.7mの隅丸方形のプランをしています。屋根を支える柱の穴が4～7本、中央に用途不明な穴（中央ビット）がそれぞれ確認されました。竪穴4の中央ビットは長方形の穴の中心に、さらに方形の穴を穿った特徴的なものでした。

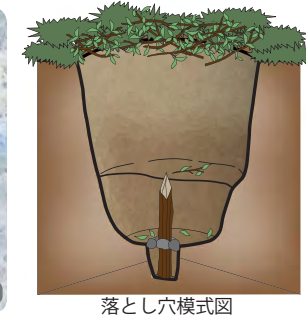
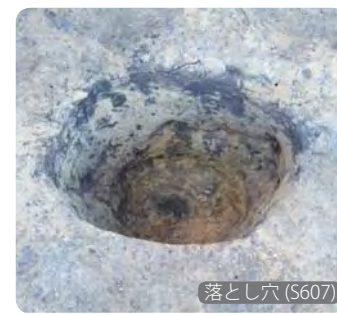


### 【縄文時代の落とし穴】

流路の東側では、黒ボクと呼ばれる真っ黒な土で埋まった穴が2基見つかりました。これらは縄文時代に動物を獲るための「わな」として使われた「落とし穴」と考えられます。

平面は楕円形で、長径約1m、深さ約1m、底面の中央には直径約15cm、深さ約20cmの小さな穴がありました。この穴に先を尖らせた杭を立て、落ちてくる獲物にケガをさせて弱らせ、仕留めやすくしたと考えられます。2区（R2調査）でも流路の西側で落とし穴が1基見つかっています。

こうした落とし穴をけもの道にいくつも掘り、木の枝や草などで見えにくくして、獲物が落ちるのを待ったのでしょう。調査区内では、矢の先に付ける石の矢じり（石鏃）がいくつも見つかっています。遺跡の周辺は縄文時代には、このような「わな」や「道具」を使った狩猟の場だったようです。





## 道路遺構

大鴨遺跡では昨年度の調査分も合わせ、奈良時代から平安時代の道路遺構が7本見つかりました。流路に沿った南北方向の道路は底面に小さな穴が並ぶ「波板状凹凸面」を持つ構造です。一方、流路に向かって降りていく東西方向の道路は、上記の「波板状凹凸面」を持つものと、小さな礫を敷いたものの2種類があります。出土した土器から両者はほぼ同じ時代に使用された道路であることが分かっていますが、構造の違いが何を意味するのかを解明することが今後の課題となります。

## 中世の田畑と足跡

流路の東側、掘立24～26の周囲では、鎌倉時代の水田と畑が見つかりました。

水田は3か所あり、畔で方形に区画され、さらに小さく区切られていました。残りのよい畔の高さは10cm程ありました。

畑は2か所ありました。どちらも深さ数cm程の、地面を深く耕した際にできた鋤の痕跡が、東西方向に密集していました。

さらに北側の3区（R2調査）との間には、流路が埋まった後、鎌倉時代に営まれたとみられる水田の上から、多数の足跡が見つかりました。洪水で水田が砂に埋もれた際に足跡に砂が入りこんだため、数百年間そのままの形で残っていたものです。

足跡の多くは「偶蹄目」という先が二つに分かれた蹄をもつ動物の足跡です。人の足跡とともにみつかったので、牛の足跡と考えられます。

これらの足跡は東西方向の列状に何か所かのまとまりがあります。人や牛が農作業の際に、歩いた方向、すなわち水田の区画を示している可能性があります。

## 奈良時代の土製支脚

奈良時代前半（8世紀前半）の竪穴建物5から土製支脚が出土しました。建物のほぼ中央には火を焚いた場所があり、ほかに須恵器の坏や高坏、移動式の「かまど」の破片などが出土しています。建物の中には造り付けの「かまど」はなく、こうした土製支脚や移動式の「かまど」を使って煮炊きをしていたようです。

イラストは土製支脚の使われていた様子を復元しています。2つまたは3つをセットに向かい合わせ、その上に甕などを載せ、下から火を焚いて煮炊きをするために使用した、いわゆる「五徳」と考えられます。

土製支脚は地域ごとに特徴的なタイプがあります。今回出土した支脚は本体が筒状（中空）に作られており、鳥取県中部（東伯耆）に多く見られるタイプです。把手を持つものは島根県東部（東出雲）～東伯耆にかけて数例見つかっていますが、非常に珍しいタイプです。



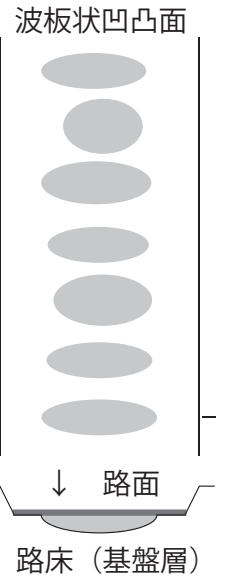
土製支脚



移動式かまど



土製支脚



道路遺構 (S278)



蹄（ひづめ）石膏型



足跡

令和3年度

令和3年12月3日（金）

おおがもいせき

# 大鴨遺跡調査成果説明資料

公益財団法人鳥取県教育文化財団 調査室



【調査主体】公益財団法人鳥取県教育文化財団  
【遺跡の所在地】倉吉市福山地内  
【調査面積】8,248㎡  
【調査期間】令和3年6月1日～12月初旬（予定）

## 大鴨遺跡の発掘調査成果

大鴨遺跡は倉吉市福山に広がる集落・祭祀遺跡です。通称「天神野台地」と呼ばれる丘陵の裾部に立地し、県史跡石塚廃寺跡の東から南東側に隣接します。昨年度に続いて調査を行い、今年度は以下のような成果を得ることができました。

- ①石塚廃寺跡の南東側で奈良時代から中世に至る流路の続きが改めて確認され、流路幅などの規模が明らかとなりました。
- ②昨年度調査で検出された、古代の流路に沿った道路遺構の続きが検出され、寺院と地域を結ぶネットワークの手がかりが得られました。
- ③鎌倉時代の水田跡が確認され、昨年度検出された屋敷地に耕作地が隣接する景観を復元できます。
- ④古墳時代前期の竪穴建物が検出され、奈良時代以前の集落の存在が新たに確認されました。

